富山大学人間発達科学部附属　人間発達科学研究実践総合センター

Center News

３５号 特別号　　２０１６年 12 月 20 日

センター長挨拶

人間発達科学部　教授　千田恭子

今年度よりセンター長を拝命しました千田です。

富山大学に着任して１５年、同じ敷地内にありながら、センターの役割や活動をについて真剣に考えたことはなかったように思います。

１６年目にあたり、このような大役を頂き身の引き締まる思いでおりますが、今後、どのように先生方の研究と教育現場との絆を強固な物にしていけばよいのか・・・。教職大学院との連携を図るにはどのようにすればよいのか・・・。皆様方の助言を受けながら、一歩ずつ前に進んでいけたらと思っています。

ご支援ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願いいたします。

着任の挨拶

理論と実践をつなぐために

人間発達科学部　講師　近藤龍彰

今年度（2016 年度）より，人間発達科学研究実践総合センターに所属しております，近藤龍彰と申します。私が専門としている研究分野は，発達心理学と臨床心理学です。発達心理学領域では特に，幼児期（3 歳～6 歳）の子どもを対象に，自分や他者の感情を理解していく発達プロセスを研究しています。また，臨床心理学領域では，小学生，中学生，高校生（その中でも男児）を対象としたプレイセラピー，カウンセリングの事例研究を行ってきました。

このように，一見バラバラに見える研究領域ではありますが，私の中では 1 つのつながりを持っている（あるいは持たそうと試みている）ところです。その際のキーワードが「理論と実践」であります。まずもって私の最終のゴールは，目の前にいる子ども・人達の個別的な世界を充実させ，よりよく生きることの援助を行っていきたい，というところにあります。私の中ではこれは「実践」のベクトルです。一方，そのような実践を行っていくためには，自分の中に「充実した世界とは何か」「よりよく生きるとは何か」に関する普遍的な枠組みを持つことが必要でした。私の中ではこれは「理論」のベクトルになります。この「実践＝個別の世界」と「理論＝普遍的な枠組み」をいかにつなげ，統合していくのか。大きなテーマですが，それだけに生涯をかけて追及していく仕事でもあると思います。その 1 つのとっかかりが，先ほど述べました「発達心理学」と「臨床心理学」の 2 領域になります。

上記のような「大志」を抱いている私にとって，実践総合センターに所属させてもらうのはとても意義あることだと思っております。なぜなら，このセンターの目的もまた，「理論と実践をつなぐ」ところにあるとお聞きしているからです。まだまだ知識不足で，その全体像にまで迫っていけておりませんが，少しお話を聞いただけでも，ワクワクするような「実践」と「理論」のお話を聞かせてもらっています。これからもっと学んでいかなければならない私ではありますが，少しでもセンターの活動に貢献し，よりよい「理論と実践」を展開させていければと思っております。

客員教授

平成28年度内地留学生演習・実習計画

センター客員教授 寺西康雄

【目的】

・教育相談担当者やカウンセリング指導員等としての資質・力量の向上を図る。

【方法】

・カウンセリングの在り方を場面緘黙当事者(ゲスト)への対応を中心に演習する。

・プレイセラピーの在り方を「けん玉セラピー」を中心に実習する。

【テキスト】

・金原洋治解説、はやしみこ著、かんもくネット監修「なっちゃんの声-学校で話せない子どもたちの理解のために-」(学苑社)

・金原洋治監修、はやしみこ著、かんもくネット編「どうして声が出ないの?-マンガでわかる場面緘黙-」(学苑社)

・らせんゆむ著「私はかんもくガール-しゃべりたいのにしゃべれない-」(合同出版)

・角田圭子著「学校で話せない子-場面緘黙の子どもが抱える困難-」(金子書房「児童心理」掲載)

・金原洋治著「学校ではしゃべらない-選択性緘黙-」(金子書房「児童心理」掲載)

・深谷和子編著「遊戯療法」(金子書房)

【振り返り】

・授業後3日以内に演習・実習の感想をメールにて授業担当者とゲストに送る。

客員教授

平成 28 年度の取り組み

実践と研究の交流と学び

より確かな教育実践とそのための支援に向けて

センター客員教授　安井俊夫

今日、基盤社会の到来や情報化社会の高度化、グローバル社会の進展など、社会構造が大きく変化しています。そして、そこでは、教師一人ひとりにこれまで以上の高い専門性と指導力が求められ、“学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築”と“学校と大学との連携による実践と研究の融合”が急務となっています。

昨年度は、その今日的課題に少しでも応えるよう、実践と研究の融合、そして教師による協働の関係づくりを進めるため、センター内に交流と学びの場をつくり、活動してきました。学校の先生に大学に来ていただき、そこに大学のスタッフも入り、互いの教育実践や抱える問題について語り理解を深めるとともに、これからの学校のビジョンについて一緒に考え、探ってきました。

今年度もまた、引き続き、月一回ですが、活動の一層の充実を図りながら進めていきたいと考えています。中でも８月の活動については、少しでも多くの学校の先生に参加していただけるよう、活動を広く公開し、講演とグループワークを企画、実施していきたいと考えています。

さらに、内地留学の先生との学習会も、今年度も月２回実施していきたいと考えています。昨今の教育施策や学校の動向、最近の研究成果などについて学び、ともに語り合う中で、これまでの現場での教育実践を意味づけし、より確かなものへとなるよう、支援していきたいと考えています。

部門紹介と計画

環境教育部門

今年２８年度より、実践センターに環境教育部門が新設されました。といいましても、新しい施設が立ち上がったり、新規採用があったりしたわけではありません。実は師範学校時代より続く附属農場が実践センターに加わることとなったものです。

附属農場は師範学校跡地の西田地方に位置し、長年にわたって、職業科教育、技術科教育の栽培部門を担ってきましたが、人間発達科学部への移行に伴い技術科課程が廃止された後は、環境社会デザインコースの授業を提供するなど、環境教育に梶を切っておりました。そこで、他大学の組織などを参考に、実践センターの一部門としての位置づけることになったものです。

経緯はともかく、農場は約３ヘクタールの田畑を擁し、以下のものを大学に提供しております。

①実習授業の実施――野菜作りを中心に、米作りや簡単な調理まで。

②授業やゼミの支援――授業やゼミで収穫体験や畑作り、あるいは幼児教育の学生への餅つき指南など多岐にわたります。

③教材の提供――家庭科教育等の授業への教材や研究資材として農産物を提供しています。

④附属学校園の教育支援――幼稚園のさつま芋栽培、栽培の出張授業、教材としての野菜の提供、栽培授業に取り組む教諭の相談対応等。

⑤公開講座の実施――生涯学習の公開講座「家庭菜園を楽しもう」は公開講座一番の人気を 10 年間維持しています。

⑥農産物の販売――教育研究用に使用しなかった生産物は、教職員や近隣住民に売り払います。新鮮な野菜が手ごろな価格で手に入ると好評な一方、大学財政にも寄与します。

本年より、実践センターの一部門となりましたが、基本的な業務の内容はかわらかわらず、特に授業ゼミの支援、附属学校園の支援など、教育関連の業務を強化したいともいます。また、公開講座も、従来は中高年中心だったものを、本年から「親子で楽しむ家庭菜園」と衣替えしました。

これらの活動は、授業を中心としたコーディネートを准教授の高橋満彦が担当しますが、実際の現場作業は技術専門職員の増山照夫が一人で担当しています。マンパワーの不足は否めませんので、本年から制度の始まった技術協力員 2 名を先頭に、数名のボランテイアさんにもお世話になっております。自耕自植が基本ですが、附属学校園を含めて学部内の教員諸君におかれては、教育研究における農場資源の利用を検討されることをお勧めします。当部門も少人数ながら、農場を中心にできることを丁寧に実行していきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

部門計画

教育臨床研究部門ビジョン＆平成 28 年度プラン

【はじめに】

教育臨床研究部門では，二人の教員（准教授 1 名、講師 1 名）が所属しており，部門として子どもの発達臨床心理学について研究実践することを目指している。

【研究および内地留学生の受け入れについて】

教育臨床部門では現職教員の再教育として年間 10 名程度の内地留学生を受け入れている。今年度は年間で 12 名程度の受け入れを予定している。内地留学生の実践研究として行ってきた研究は複数蓄積されており，そのうちのいくつかは実践センター紀要に掲載されている。内地留学学生への指導は，講義の聴講のみならず，研究指導を含めて行われている。今後も学校臨床に関する知識を生かした教育を推進し，また研究を通して自らの実践を振り返ることができる能力を身につけた教員養成に寄与していく。また、一部の内地留学生は将来的にカウンセリング指導員となり活躍することが期待されている。そうしたところにも寄与するための研修プランを企画している。

【地域と大学のリンクについて】

今年度も教育と臨床に関する研修会をいくつか企画している。8 月 3 日には富山大学人文学と共催の形で、「不登校予防に生かすチームでの支援」というタイトルで、東京学芸大学から小林正幸先生をお招きし、現職の先生方を主たる対象とした研修会を企画している。また、8 月 6 日には富山県臨床心理士会と共催の形で、非行臨床に関する研修会も予定している。こちらは学校場面で活動する臨床心理士向けの研修会でもあるが、上記の内地留学生の参加も予定されている。

部門計画

学習環境研究部門

平成 25～27 年度の 3 年間は，授業における効果的な ICT 活用の方法等について研究を進めるとともに，それらに関連する研究会や講演会を開催してきた。本年度はこのような ICT 活用に関わる研究を進めると同時に，小学校段階におけるプログラミング教育の在り方についての研究も進める。プログラミング教育については様々な校種についての実践が考えられるが，本年度は実践例が少ないと思われる小学校段階を中心に検討を進めていきたい。講演会についてもプログラミング教育に関わるものを開催する。

【講演会の開催】

11 月には，青山学院大学の伊藤一成氏，竹中章勝氏を講師にお招きして，これからのプログラミング教育の在り方についてご講演をいただく予定である。プログラミング教育についての豊富な経験を基に研究を進められている両氏から，プログラミング教育の現状や今後の方向についてお話しいただくことを通して，小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について考える機会にしたい。

【ICT を活用した授業実践】

昨年度もタブレット PC の有効な活用方法について検討を進めたが，本年度は当センター研究協力員である南砺市立福光東部小学校の齋藤雅弘教諭とともに研究を進める。４人程度の小グループに 1 台ずつのタブレット PC を配当して活用させる場合，どのような活用方法が効果的であるかについて，授業実践を通して明らかにしていきたい。

【プログラミング教育についての授業実践】

人間発達科学部附属小学校のコンピュータクラブの活動で，児童にもプログラミングが容易とされている Scratch によるプログラミングの学習を実施する。小学生が関心・意欲をもって取り組める活動内容はどのようなものであるかについて実践を通して検討する。

部門計画

教育工学研究分野

平成 28 年度の教育工学研究部門の活動計画について報告する。

(1)教養科目「情報処理」のカリキュラム開発と評価

昨年に引き続き，情報処理の教科書の編集を行う。特に，教養教育の一元化に伴う，杉谷キャンパスや高岡キャンパスとの教育内容への対応の検討が課題となっている。

(2)小型コンピュータを利用した教育環境の整備

昨年に引き続き，コンピュータの仕組みの理解を重視した，小型コンピュータの教育における可能性について，ハンズオン形式での教育環境を整備する。

Ａ．組み立て式コンピュータ Ichigo Jam によるコンピュータの理解促進

昨年開発した Ichigo Jam の教材を改善し，自分たちが組み立てたコンピュータでプログラムを作成する演習授業を試行する。

Ｂ．Raspberry Pi によるソフトウエアに対するメンタルモデル形成

子ども用教育用 PC Raspberry Pi を利用した，演習形式授業を実践する予定である。

(3)iPad 用教材合発環境の整備

Xojo2016 による Mac-Windows 共通のプログラム開発環境を利用して，iPad 用のアプリ開発プログラミングを検討する。

(4)心理学実験用プログラム開発教育

教育用プログラムの１つの形として，心理学実験用のプログラム作成を教える授業を実践し，評価を行う予定である。